

ピンチョン『ヴァインランド』論

樋口 日出雄

I

まず調書風にはじめると、当人プレーリーは、ゾイドとフレネジーのあいだに、当地カリフォルニアで第一子として誕生。すぐに母の失踪にあい、父と二人の生活をはじめが、父も精神障害者用小切手を支給される身の上であり、多難のうちに祖母（フレネジーの母）サーシャがこの孫娘の生活の担い手として浮上し、この祖母の住むロスから、娘をひき取ったゾイドが、ヴァインランド（カリフォルニア州の北部山岳地）に行き着くまでは、期せずして旧友との再会旅行となっている。

この旅行の行程の一部はDEA（合衆国医薬品施行局）の捜査員ヘクターと同伴である節が見てとれる。ピンチョン（Thomas Pynchon）の作品歴のうちでは、カリフォルニアを主たる舞台にするのは『競売ナンバー49の叫び』（*The Crying of Lot 49*, 1966）以来であり、ここに論じる『ヴァインランド』（*Vineland*, 1991）に、この先行作品と重複した人物としてムーチョ（Mucho）なるキャラクターが出るのは書き心地の良さということもあってのことであろう。人物の造形ということになれば、まず海岸沿いに住む旧友のなつかしい顔ぶれから、ヴァインランドの山寄りの目先きの変わった方向に向くのである。

Mucho に関しては――

…あまりに中古車売場を認めすぎ、放送局をまったく認めない。

それなのに、いま、薄明の居間でムーチョを見れば、上昇気流に乗った大きな鳥のように、水滴をつけたカクテル・シェーカーに向かって滑走し、グラスの底の太い渦巻きの中心から微笑みかけているのだから、まるで四海波しずかに金色に落ちついていると思ってしまうだろう^(注1)。

という人物造形がなされていた。ピンチョンは *Lot 49* を売り出した1966年当時には、それまで貯えてきたことの大部分を忘れてしまったという趣旨の告白をしているが、そのあたりの事情は、書きためた短篇を一巻にまとめるに際して、そのタイトルを『スロー・ラーナー』（覚えの悪い子）^(注2)としたことにもうかがえる。

Lot 49 では〈big brother〉(G. Orwell の Big Brother ほどのメディアの大立物ではない小文字の兄弟分) にすぎなかった Mucho は、作品の最後で離婚したも同然の女主人公エディパに会った際には、忍耐強い、母性的な表情を浮かべている。これは悪夢に悩んでいた神経質なムーチョが、LSD をやりだした証拠ともいえるが、同時に音楽界の〈人寄せのための細工名人 (a walking assembly of man)〉として多重人格者となり変っている証左であろう。*Vineland* に至って、この人物がコカインで鼻をやられ声がつぶれているのは、若者文化の全盛期である60年代、70年代を通過するのに、有り金を麻薬に使い果たしたことを示していよう。

レコード業界の大立者として鳴らした彼は、最後には Telegraph Hill town house に引退の身で、麻薬撲滅のキャンペーンに精を出している。オーウェル流に言えば Big Brother になれずに big brother にとどまったということになろうか。ピンチョン流のギャグと目されるのは、このムーチョを Telegraph Hill のタウン・ハウスに落ちつかせたことであり、*Lot 49* のエディパが謎の郵便制度の正体を追ったことにちなんで、彼をして電信電話制度の資本が造成した土地の住人を演じる役どころを得さしめているのである。

II

ピンチョンに注目した日本の読書界のうちから目立ったところを選ぶと、英米文学研究者を除けば、寺山修司、池沢夏樹両氏のような実作者があげられる。

寺山氏は実際に、『競売ナンバー49の叫び』の訳業を手がけようとしたが、ついに年月は氏にこれを完成させる余裕を貸さなかった。池沢氏には「『V.』の航時性について」と題したピンチョンの大作『V.』（1963）論一篇がある（注³）。

*Vineland*では、ついに日本を作品の舞台に巻き込み、新宿や丸の内を描き、日本人タケシ・フミモタをアメリカ人女忍者 DL とつるんだ同行二人として、日米間を行脚させてみせたピンチョンは日本で自分の作品のグループがいることを知っていたらどうか。

ついでに言えば、*Vineland* 作中での新宿は1978年、ヤクザの抗争のさなか、ヒルトン・ホテルでは国際防犯会議が開催中という時期にあたり、ポスト・ヴェトナムの日米協調路線に立った夾雑物のない外界との緩衝地帯での軟体動物的状況にある。コップの中の嵐めいたヤクザ抗争はあっても、タケシが女忍者 DL の不屈な手の技で、何かおぞましい患部でもなでられるような目にあう「春のデパート」（売春組織）での一件も、日本版ロバート・レッドフォードのタケシを、システムの端末的なプログラムの内にとり込む仕かけである。

このようなラフスケッチは、タケシをムーチョに近づけたりもするかもしれぬ。家族の絆などという言葉を人生の濁りと感ずる精神のありかが

ムーチョ	{	妻	Oedipa
		愛人	Tuillium

タケシ	{	妻	Yomama
		愛人	DL

といった命名により自明となる。人物の命名法については、先の論において池沢氏は――

あまりにアレゴリカルな人物の命名法にもその意図（著者注——引用が多くジオラマのような作品を目指すこと）は見てとれる。主人公二人にプロフェインとステンシルという名を付ける厚顔に比べれば、形成外科医がションメーカーだったり、駆逐艦スカフォールド号の電子機器担当下士官がヒロシマであるくらいはなんでもない^(注4)。

と述べているほどであり、登場人物の意味の過剰を指摘したところで、「学部の卒論のレベル」を越え得ないとも付け加えている。

本論においては、固有名に関して明らかにする範囲を、意味の過剰ではなく、音のエコー（擬音・擬声を含む）に限定してみよう。ムーチョの妻エディパは、そのものずばりエコー（Echo）という名のモテルに宿泊する。*Vineland*において彼はレコード業界に進出し、引退してから家には、*Tuillium*という女性を住まわせている。これが電話やファクシミリの呼び出し音であることは自明である。

一方、アメリカ人が夢を紡いだ映画のスタジオを買い取った日本人バイヤーのタケシは、ミチコ Yomama という名の女優を妻帯していたし、DL と不思議な縁を以って結ばれてからは、この女性とますます離れ難くなってゆく。前者には、中国人のチェロリスト Ma Youyou のエコーがあるし、後者はハイテクの蘇生器を駆使する女修道場であって、タケシを救うさいの、＜DO LULU＞というマシンの震動音のように響く。ポーキュトロンという機械の名は当然＜タヌキ（porcupine）＞とのコノテーションを含む。このようにして、タケシと二人の女性との関係が音を聴きとる耳さえあれば正体をあらわす仕かけとなっている。前者はミュージカル女優との連想をさそうであろうし、後者はぶっそうな武芸を身につけた女として、商業映画によくでるタイプ（和風にいえば「くのいち」洋

風にはアマゾネス)の原始人的叫び(あるいはウォークライ)であろう。寺山氏がいかにも好みそうな、変な芸名が紡ぎだす複合テーマではあるまいか。

III

もうひとつのテーマは、ツアーリズムは人種的に弱少な方から、強靱な方に向かって強行されるという一事である。日本人のタケシを人種的に弱少といえば語弊があるが、この人物はツアーリズムに便乗して、ハワイとアメリカ本土とのあいだに貨物便を飛ばしているさなかに、不定期便であることを幸いとして、旅客を招き入れる。さらに怪しげな生物体によってハイジャック寸前の目にあうというエピソードは、大地をタペストリーとして織り成す *Lot 49* のテーマを引きずりながら、日系企業がより強靱な体質を願って、多国籍の方向に向かわざるを得ない企業合同への道を示唆している。タケシは DL の母親によれば、ロバート・レッドフォードを日本人に格下げしたものである。

タケシと DL の二人組は、巻末において活力剤アンフェタミンを求めてヴァインランドのニワトリ小屋を襲う。国際的に伸びた企業のオーナーにして、ついに取り散らかした原始共産社会の恵みあたえるところに叩頭したようにも見える。このエピソードも、もとをただせば、ツアーリズムの最後に残された秘境が原始社会と一致することと等価であろう。

DL のパークレー時代の学友フレネジーは、またしても調書風にいえば、ニクソン時代に反体制で鳴らしたカゲキ派の女であり、一身の限りを尽くして映像製作に身を置こうとする余り、いい絵柄を取らんと連邦検察官ブロック・ボンドの差し金で、反体制の大学教師アトマンの主導する「ロックンロール共和国」というコミュニンにピストルを差し入れる。やがて夫であるゾイドの物件が、ボンドの手で強制執行の処分をくらい、ゾイド本人も収監されて以後、娘プレーリーの行方ひとつ気かけなかったことから、この女性も弱少から強靱に向うツアーリズムのパラダイム組替えに準じているのである。

DL とタケシのエピソードのうち、DL が「春のデパート」の連中にとっつかまり、処方箋通りにコンタクト・レンズの配給を受けられず、他人のコンタクトを填めたため、ボンドとタケシの区別がつかなかったのも、
 (... Cheapskates at the ol' Depaato wouldn't even spring for a pair that was in my prescription)^(注5)

旅行業者が目的地に着いて、旅客の好みに応じて訪問地を選択させるオプション・ツアーを思わせる。

さらに言えば、「春のデパート」というネーミング自体にフロアーごとに客筋を選別し、収入を高める Mob (ジャーナリズムでマフィアを指さして用いることば) とツアーリズムとの混淆を見るのである。人種的に白人を狙ったものが、間違っただ日本人が送りこまれても拒まないのは、多角経営の企業では日常のことである。

IV

若者文化の受け皿となることにかけては超一流であった寺山修司の晩年の仕事は――

- (1) 商業映画でマルケスの「百年の孤独」を監督 (彼の歿後「さらば箱船」と題し公開)
- (2) 自作の映画を上映のため訪米
 映画祭 (コロラド州テルリード) 参加とパークレー校にて上映会とスピーチ
- (3) 翻訳

ピンチョンの *The Crying of Lot 49* は、サンリオ文庫での出版を目指して、早くから友人にその進行中である旨を告げているが、ついに完成を見ずに終わっている。(途中までは「ロット99」と題名まで間違っている)

と多彩であるが、ピンチョンの *Vineland* に関して、大まかにこの(1)～

(3)に内容をあてはめてみると、――

(1) ページ (286. p) 上にプレーリーを指して the sleeping Prairie という表現を使うのは、ディズニー映画 The Sleeping Beauty を意識してのことであろう。

(2) 映画製作の現場という点からいえば、作中に描かれているものに、パークレー校の映画製作グループによるドキュメントとして、「ロックンロール共和国」の最後の日の状況がある。

フレネジーが口にする “It’s only rock and roll” というものいいは、Mick Jagger & Keith Richard の1974年度作品のタイトルよりとったもので、その意味するところは

“It doesn’t matter ; the importance should not be exaggerated.” (注6)

である。

(3) 素材論をやるつもりはないが、タケシとDLのエピソードは、少し素姓の怪しいお兄さんと花魁とが手に手をとってメリケンに渡り、腕に覚えの花魁が先導して霊界を巡る霊界コメディであり、日本の因果話しの翻訳 (パロディ) である。寺山には映画「百年の孤独」と併行して完成したチャイナドールと呼んでいた初の商業映画「上海異人娼館」があり、1981年友人にあてたニュースレターでは「上海異人娼館」がヒットしないと次作「百年の孤独」の予算が組めないと告げている。

79年寺山氏がパークレー校で自作の映画作品を上映したときには、これら商業映画は完成を見ていないので、ピンチョンが寺山の作品を目にした可能性はないが、ピンチョンが寺山のチャイナドールに対抗してバービドール (Barbie Doll) の霊界巡りを目論んでいたことは確実である。

たとえば次のような一節において――

Ralph Wayvone, master of telepathic anxieties, tried to be helpful. “They wouldn’t need any fancy excuse, Miss Chastain, they just go in, get anybody they want, do the paperwork later — what, you ain’t figured that one out yet? I’d known you was such a little kid I’d o’ brought yiz a Barbie doll.”(注7)

マフィアの帝王ラルフ・ワイヴォーネによる DL (Chastain は DL の本名) に関するコメントの中にでるこの Barbie doll (ブロンドの白人女性をかたどった人形) が、イタリア系男性による WASP の女性へのあてこすりである可能性は大であろう。人種的意識をこめたアンファンテリズム (幼児趣味) も、寺山やピンチョンにおいて顕著なものである。マフィアの white slave (売春組織に売られた白人女) である DL をつかまえて、blonde Tomato (ブロンドのかわい子ちゃん) などと形容する口ぶりにもその片鱗が見られる。

ピンチョンは *Slow Learner* の序文で、思わぬところでボロを出す作中人物について、「カッコウをつけて、間接的にすると、そのページで死んでしまう」と自らの心淋しさを隠さずのべているが、タケシと DL とを括って、“cute and remote” (カッコウをつけ間接的) という光源から像を結ばせると、この二人は作中でも華やかさという点で、その最たるものであろう。

作者ピンチョンは、この Barbie doll と R. Redford 人形との組み合わせを作中に拉致して、ついにニワトリ小屋という取り散らかした原始的生産の様式を残した場に追いこむ、あげくにタケシの会社を、ゴジラを思わせる節足動物の足で踏みつける。文字通りこの二人を足下に踏みひしいたのである。

V

タケシとDLという人気俳優のあとでは、ゾイドとフレネジーといういまひとつのペアには、読者は険しい表情を向けるのではないだろうか。ゾイドの場合は、マリファナ所持のかどで自宅が接収され、本人の収監を経て、政治力学的にいえば、精神障害者用小切手を得るため、官憲に自らの出处進退を明らかにする必要があるって、年に一度のガラス破りのスタントを受け容れる。判事のボンドと捜査員ヘクターのあいだで、ゾイドの扱いをめぐって行き違いがあることは事実で、ボンドがゾイドの家を接収してからは、ヘクターはフレネジーを起用して、麻薬撲滅の映画を製作しようとする。

ヴァインランドが交信しようとするのは、いかなる体制下のアメリカなのであろうか。74年当時、地滑りを起こして森林に被害を及ぼした地震の跡が縦横に走るヴァインランドは、10年後再び官憲の水も漏らさぬ厳戒体制下にある。Rex '84とよばれる大統領指令による連邦の総力を結集した演習が、オリンピックイヤーという世界の民族を集めた祭典のさなかにも、強行されようとしているのである。

巨悪の判事ボンドを一員とするRex '84は、とりたてて麻薬を一掃するというような目的を掲げていない。しかし演習部隊がマリファナ畑に除草剤をまき、あるいはこれを焼き払うという手段は禁じられていない。

折からゾイド＝フレネジーの家系に連なるトラヴァース＝ベッカー一家系の一族再会がヴァインランドの森で行なわれんとしており、ボンドには自分の手の内から脱走したフレネジーを連れ戻し、その娘プレーリーもあわよくば手を伸ばそうという魂胆がある。レーガン大統領の指令によるRex '84の中止以後にも、ボンドは自分の勝手に従って、自己中心の任務を続行しようとするが、そのあたりはテキストの上でファンタジーの領域であり、ボンドは一旦死去したものとも思われる。

ファンタジーの領域内にある人物は、ボンドひとりにとどまらない。タケシ＝DLのコンビは、DLが自らの武芸を発揮してからというもの、

麻薬の助けもあって死後の世界に入っている。二人がニワトリ小屋を襲い、そのエサに含まれるアンフェタミンを求めるくだりは、死後の食事＝麻薬（アンフェタミン）との観念連合によるものと想像されてくるのである。

Rex '84 のさなかというか中止指令後も、ボンドがプレーリーを上空のヘリコプターから襲い、プレーリーの口から ——

... my blood is type A. Yours is preparation H.

という返り討ちに等しい応答を得るのは、H（ヘロイン）とA（アンフェタミン）の差に注目していると解する外はあるまい。アンフェタミンに関していえば、DEAの行政法判事は（1985年以後と考えるとよい）これをスケジュールIに指定しようとしたが、控訴裁判所がのちにDEAの裁決を無効としたいきさつがある。

VI

フレネジーについては多くの男性の熱愛の対象となる人物にふさわしいのかどうか、疑問なしとしない。パークレーでの才媛も、プレーリーという一子を成してからは育児ノイローゼ気味で、見かねたプレーリーの祖母サーシャが面倒を見ざるを得なくなる。

ブラックホールのような空洞を晒しているのが連邦判事ボンドとの関係であり、ゾイドとカリフォルニア州で会った際に、すでに連邦によってマフィア対策のスパイ（Sting）として起用されていた可能性もある。ゾイドとのあいだの結婚も偽装の疑いもあろう。ボンドの術中にはまっていたフレネジーは、72年にはウォーターゲイト事件でニクソン政権に波紋が起ると、スパイ作戦を続けていた仕事がへり、マイナーなものに転用されることが多くなり、フラッシュ（Flash）という地方の連邦局員との縁ができ、やがて結ばれてこの男とのあいだにジャスティン（Justin）という一子を儲けている。

ひとときも家に居つかぬフレネジーは、ボンドと関係を結んでいた一

ボンドの奴は総取りにするつもりだ。あやつは思いのとおり

やっつてのける。それというのも総取りの瞬間から、手持ちのカードを女が出す必要がなくなることは双方にわかっており、二人はなおカードがあるとでもいう風に気だけはもたせるようにするのだ。

... he would have everything, the little fucker would get it all his way, because from then on, though they would still now and then pretend, both knew she had nothing more to negotiate with. (注8)

これだけの引用ではボンドとフレネジーの力関係を表わすには不足であるが、ゾイドの手の内からボンドのもとに鞍替えしたフレネジーの陥った大きな空洞が暗示されており、やがてボンドのもとから地方公務員フラッシュと駆け落ちする運命をも暗示している。

ボンドは足がつかないように用心して、個人コレクションのピストルを反体制のコミュン「ロックンロール共和国」に持ち込ませる。最初は自分の身を心配して、護身用として調達してくれたと思ったフレネジーはボンドに礼を言うが――

私の身の安全を考えてみているの、ボンドさん。何とやさしいこと。でもネ、さっさとそれを渡してよ。気にすることなんかこれっぽっちもないわ。

“ And you're thinking of my safety, Brock how sweet, but come on, it's only rock and roll ” (注9)

ボンドはフレネジーを仲介者として使い、ピストルを Rex という第三世界に肩入れする過激派青年に渡そうとするのである。パークレー出身者を中心とした24 FPSという映像製作グループ（フレネジーもその一員）

は、この「ロックンロール共和国」のドキュメントを撮映中で、このピストルによる主導者ウィード・アトマンの殺害現場がフィルムに収まる。

ピストルはいうまでもなく〈男性生殖器〉のイメージがあり、“It’s only rock and roll”とあってそれを受けとろうとするフレネジーには、この表現の意味（I don’t care）とは別に、不義不倫を仕かけられても自分はOKだという意志表示に近いものが感じられる。ボンドの立場はカードゲームにおける「親」のそれであり、彼の掲げるモットーUp the unte（分担金を収めろ）にしても、「親」としての「ショバ代」を催促しているように読めると同時に、刑務所に入った女性に、ガンをちらつかせてセックスの対象になるように迫るボンドの狡猾さに徴してみても、unteについても男性器のコノテーションを読み込んでよかろう。ガンは他人に使わせて、自分では塀の中に入った者をいたぶる役回りに徹するボンドは、相手の弱味を利用して自分を相手に向けて「ふっかけ（stick-it-in）」ているのである。

VII

フレネジーは男性原理に関して――

Men had it so simple. When it wasn’t about Sticking It In, it was about Having The Gun, a variation that allowed them to Stick It In from a distance.^(注10)

と考えて行動している女性として読者に紹介されるが、ピンチョンもよく読んでいるアメリカの思想家ヘンリー・アダムズなら〈ダイナモ〉と名付けるであろうこれらの男性原理は、同じくアダムズが〈ヴァージン〉（聖母マリア）と名付ける女性原理で代替されるはずである。

今にみていなさい、と彼女はひとりごちた。こんな簡単な男性原理はひと思いに打ち破ってやるのよ。私が信じている映像グ

ループの方が、よほど新しい、強いレベルのものとなるはずだ
わ。家の常備品、おハジキなんちゃって。

Her impulse was to deny his simple formula, to imagine that
with the gun in the house, the 24-frame-per-second truth she
still believed in would find some new, more intense level of
truth, is what she was telling herself.^(注11)

＜Have The Gun＞という納まり返った男の視線に反撃を開始すべく
待機すること。その背後にひそむ空洞をひきだし、白日のもとに晒すこと。
ドラヴァース・アンド・ベッカーという二家系をたばねた再会の儀式は、
女性原理がこの空洞をどう埋めるかという試練の場であった。

母親犬にそっくりの飼犬デズモンドがボンドの手から逃れたプレーリー
の顔をなめて、朝の眠りから起こそうとしたり、ヴァインランドの港から
上陸してきたロシヤ青年が手にしたギターを武器にプレーリー救出にかけ
つけるのが、この作品のラスト・シーンであるが、犬もギターも立派に
＜the gun in the house＞の役を果たしているのである。

Notes

- 1) Thomas Pynchon, *The Crying of Lot 49*, (London: Pan Books Ltd) p. 9.
日本語版は志村正雄 [『競売ナンバー49の叫び』サンリオ文庫] を参照した。
原文は
He had believed too much on the lot, he believed not at all in the station.
Yet to look at him now, in the twilight living-room, gliding like a large bird
in an updraught towards the sweating shakerful of booze, smiling out of his
fat vortex ring's centre, you'd think all was flat calm, gold, serene.
- 2) Thomas Pynchon, *Slow Learner* (New York: Bantam Books, 1984, 1990)
- 3) 池澤夏樹, 『都市の書物』, (東京: 大田出版, 1990)
- 4) 池澤夏樹, p. 197.
- 5) Thomas Pynchon, *Vineland*, (Harmondsworth, Penguin) p. 151.
- 6) Nigel Rees, *The Phrase That Launched 1,000 Ships*, (New York: Dell Publishing, 1991) p. 201.

- 7) Pynchon, p. 131.
- 8) Pynchon, p. 242.
- 9) Pynchon, p. 240.
- 10) Pynchon, p. 241.
- 11) Pynchon, p. 241.